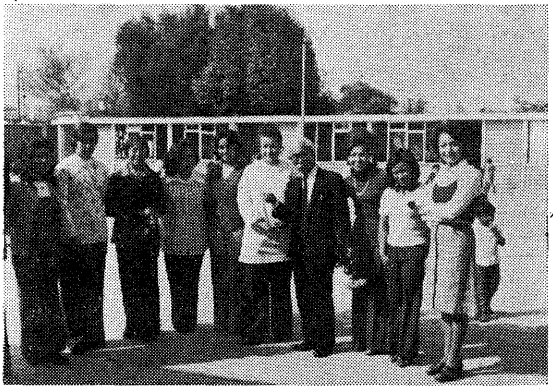
はじめてのアメリカ・メキシコの旅(下)

周郷　博



ロスアンジェルスへ――そこからメキシコへの一人旅

アマーストの回心の三日――「心温まる」三日に別れを惜しんで、その日の午後ハートフォードからニューヨーク、その夜の飛行機に乗りこんで十時過ぎ、ロスアンジェルスへ舞いもどってきた。翌十二月三日は馬鹿でかいディズニーランドの一部観覧、リットル東京での昼食といった観光コースのあと、小さな「クロバーデール幼年学校」(私立)を訪ねてみた。この学校のやり方とそこの女校長イサベラ・ウィーナーという人の考えは、私には大へん興味があった(これも後でまとめて書く)が、アメリカという国はなんといっても大陸(大きな国)で、アメリカといったって、アマーストを除いたら、東部のワシントン、ニューヨークと、それから、このカリフォルニアの南のロスアンジェルスに、飛びとびに寄って「あちこち覗いて歩いた」という程度。アマーストが「静かな京都」なら、ここは巨大な「人工の浅草」みたいなところ。街路樹を植

えても、すべて「人工のスプリンクラー」で育てられる。私はこのロスアンジェルスで一行九名と別れて一人になり、二晩ホテルでゆっくり休養をとって、六日の午後WA機でメキシコに発った。その前日五日の夜明けに、北のモンテレーから、アルジェリアの詩人ナセレディーンさんから電話がき、また夕方六時にはメキシコのマリヤさんからメキシコにいつ着くのかを電話で訊いてきた。

一人で空港ロビーにいたら、インド人の服装をした、ひどく美人の白人の女性に「ハレ・クリシュナ」の信仰についてしつこく言い寄られたが、禅、ヨガ、TM（超越冥想）など、機械化技術化の袋小路から人間がどう脱出するかを、真摯に模索している雰囲気が私には感じとれる。そういう「井戸の中の蛙」から広い世界にでて新しい世界観・人間観を探しもとめる一面と、同時に、日本とはまるで違う若者たちのレアリスティックな（現実主義的な―飾らない）態度も、私には「かわいく」好感がもてた。ホテルでも、食堂のアルバイト女子学生が愛嬌よく気軽に話しかけてきたし、飛行機の中でも、メキシコへ一時帰るアルバイト学生と隣合せになって話したが、彼らはみな English を勉強している、と言う。「英文学か？」ときくと、「そうではない English を勉強しているのだ」というのだが、それでアメリカで「職につくため」だというのであった。日本の学生の「英語（勉強）」とは違って、個人々々自分の責任で生活していこうという「かわいさ」が感じられる。メキシコ、グァテマラ……南の方からこのアメリカへ「出かせぎ」に来ている人々が多いことが嗅ぎつけられた。

六日の晩七時半にメキシコに着いて、迎えにきていたマリヤとマルタに車にのせられてマリヤの家へ行って、それから五日、ホテルに変ると言い出せないまま、ずっとマリヤの家の家族、親類といっしょに過ごしてしまった。

地図の上で想像するのと大ちがいの巨大な都市――日本と違って戦争なんかしたわけではないのに、メキシコ・シティーの人口は過去三十年の間に、かつて百万そこそこの人口が東京を上廻る千百万を越えている、というのに先ず驚かされた。東京以上の自動車の洪水、太陽のピラミデに行く大きな自動車道の右側に延々とつらなる、日本では想像もできないスラムの群れ（南米の都市はみんなこうだ、とマリヤが説明してくれた）――町の中でも、赤ん坊をかかえた乞食や、騙されて「売られて」きたインディオの惨めな姿をみかけた。アメリカ（及び他国）の大資本の「見えざる手」で耐えがたい貧困に陥れられた結果のこの「都市化」のすさまじさ。南米の南の果てまで「この見えない手」が及び、どこ

にもこれに似た地方文化と生活の破壊が進み、都市化と貧困化が起きているのが想像できる。

着いた夜の二時頃、心臓が「おかしく」なった気がして、隣室のマリヤを呼んで少時「不安」を訴えた――誰もがこの海抜二千二百メートルのメキシコへ着いた当初は経験することだと後でわかったが、翌日、マリヤの姉さんがお嫁にいっているスペイン系のお医者さんの「お城のような豪邸」に連れていかれて、この「不安」は一掃した。貧富の差の大きいこと――が、なぜか、これも私にはなつかしく思える。一六〇〇年代に建てられた古びた教会のミサに集まっている民衆、素朴な物売り。この「親しさ」は日本ではどこにもない。「子どもたちを、自由で、責任をとることのできる者に教育せよ Educare Los Ninos Libre y Responsable」と、町のあちこちに目立つように書いた黒々としたことばが目につく。アメリカに隣接した、この「第三世界」の一線に立つ「社会主義路線」を歩む、エチェベリヤ政府の苦衷と「誇り」を感じさせる。

黒沼さんは、予定した山の中のインディオの山の部落に七人も人殺しがあったというので、モンテッソーリの教育法で部落の子どもたちの教育をしているというその部落へ行くことは中止にしたが、黒沼さんにいろいろと話を聞いて、私は「はじめて」のように「たんなる知識」ではない「第三世界」の「拡がりと問題」を肌身に感じて知った思いがあった。インディオは「見せもの」ではない！ と納得した。黒沼さんのところで、イワン・イリイッチはアフリカへ行くというので「そわそわ」している、と聞いていたが、月曜に大使館へ行って、クエルナヴァカへ電話で問い合わせてみたら「もうアフリカへ発った」というので、これも宿題に残し、黒沼さんの家でマリヤといっしょに夕食を食べさせてもらったりして楽しい夜の時間を過ごした。黒沼ユリ子さんは、驚くべき技倆をもった世界的なヴァイオリニストだが、その小柄なからだと心はなんと淀みなく「流れて」いて「素朴」なことか。夕食のとき、シャボテンの葉を材料にした彼女の「芸術作品」の一種のような「つけもの」をご馳走になった。

黒沼さんに一日、国立人類学博物館に連れていってもらって「へとへと」になった。日本では想像もできないスケールとその展示の見ごとさ――そこで、メキシコ国立大学のミグエル・レオン＝プルティリアという人の「アステックの思想と文化」という本を買って読みあさったり、黒沼さんの書棚の「マルクスと聖書」など……私には「新しい世界」だし、また書店で、メキシコの読者層が「意外なほど」知的水準が高いのを私は感じとった。

マリヤの家にいて、食事どきなど、私がうろ憶えのスペイン語を混ぜて冗談を言うと、お母さんが「こぼれるような」笑い顔で笑いくずれる。メキシコ語が話せるようになりたいと思った。ある日、このお母さんや、マルタにまで「メキシコとアメリカと、どっちが好きか」と大まじめで訊かれた。マリヤが日本にいたころ「私の国はアメリカのすぐ隣りの国なのにアメリカの真似はしない。どうして日本はアメリカの真似ばかりするのか」と私にいったのを思いだした。私が「一人で《自由に》町へ出たときに若し道がわからなくなったら」といってところ番地を書いてくれた。そして車に乗っても、お金を払うとき「お金を全部見せるのじゃないよ」などという「昔あった」ような「心づかい」が私はうれしく、こんなメキシコにも、私は手ばなしの好意をもった。その日、マリヤの兄さんが、車で湖水のあるソーチミルコというところにある、奥さん（マリヤの義理の姉）が働いている幼稚園へ連れていってくれた（十頁写真）。けっして設備十分とはいえないが、そこにいる先生たちも子どもも、手伝いに来ている町の人も、私はこんなに「教育が生きている——人なつこい」幼稚園を日本でほとんど見たことがない。メキシコ大学付属幼稚園のお母さんたちの集まりにも出たが、「モンテッソーリはきびし過ぎるから、ここではやっていない。むしろピアジェだ」と英語を話せるお母さんが言ったが、富裕は富裕で、メキシコは「官僚くさい」ところが少しもなく、どこでも人心地を快く感じさせて後味がよいのだった。

何が「わかった」か？

十一日の早朝メキシコを発って（マリヤとマルタに送られて）ロスアンジェルスで一泊して、翌日ハワイへ。空港でボーディング・カードをもらうときに話しかけたフロリダのおばさん——パウラさんと「アメリカはサッド sad な状態……答えは神（God）だけ」といった話から昔からの知り合いのようにハワイまで四時間、親しい人のようにいっしょに楽しい旅をした。「神さまは、不幸とか犯罪とか……人間が《気がつく》のをいつまでも待って《自由》というものを与えてくれているのだ」という考えにも、私は賛同できた。

——さて、この幼児教育の研修を主題にして、私はどれだけのことを「学んだ」のか。もちろん「幼児教育」という部分だけを「摘みとって」くることなどは初めから私の意図したことではない。それは、「人間といっしょにあり」その国、その地方の「生活というものといっしょにある」。公害汚染や生活破壊といっしょに「文明」というものは、ときに人間関係＝夫と妻、友人、教

師と生徒などの関係をいちじるしく変えたり「冷たいもの」にする。私はその「情緒的親しみ」とその延長線上にある「知的親しみ intellectual intimacy」と――破壊とは逆の――それを立てなおす一片の「希望（入試や点数あさりのことではない）」のようなものがないところでは、どんなに幼稚園や大学がたくさんできても「教育にはならない」と思う。長たらしく幼児教育とは無関係に見えるようなことを書いてきたが、そういうよいものを「成立」させる幅の広い「条件」（日常生活を支えている人間的なもの）について書いてきたと思ってもらえないだろうか。

私はアメリカの教育＝幼児教育を「礼賛」するためにこんな旅にでたのではない。メキシコだってそうだ。人が「知らない」ことを「いいこと」にして「本山詣り」でもしてきたように「いいものづくめ」のみやげ話などしようという気は毛頭ない。アーノルド・ローズ氏にも会う暇なくニューヨークを離れ、英子さんの主人アレックス（コロンビヤ大学）さんとも行き違いで会わずに終った。アレックスに会ったら、アメリカの「困り果てた状況」について彼独特の見かたを聞かせてくれたろう。一九五七年、ソ連のスプートニク打ち上げ成功の頃からのアメリカの「教育の混乱＝苛立ち」はよく知られている通り――だからこそ、アメリカはまた戦後の「教育改革」の有力な震源地の一つにもなって、大きく動いている。いまも、なお「混乱」のほうが多いと見られるけれど、それを解決して「新しい地平」を探し求める「気力」「無邪気さ（正直さ）」――何かしら「創造の動き」があるのは私にはすがすがしい印象として残った。

幼児教育という側面からみると、一九五〇年代の末から六〇年にかけてモンテッソーリの教育法（それとピアジェの「考える人間」に成長していくプロセスを関連させた）にもとづくナースリー・スクールや幼稚園が、「雨後のタケノコ」のようにどこにもできてきたこと、が注目される。「精神衛生」という見地から、この動きは、従来の「子どもを甘やかす」やり方――従来のアメリカの「児童研究」や「児童中心」の、中産階級の中に芽生えた上ずったやり方を脱皮して、新しい側面をつくり出していることを知らされた。それに、アマーストでも見たが、五、六、七歳混合といった、イギリスのインファント・スクールのやり方が結びつけられる。

アメリカは、日本と違って「しつけ」はきびしいのだが、日本に帰ってから読んだイギリスの経済学者ハロッドの『社会科学とは何か』（清水幾太郎訳、岩波新書）の中に、「明確なパターンがなければ、つまり躾がなければ、感情の真空が生まれます。それ

は、長期的にみて、健康によくない」という一節を読んだ。モンテッソーリの「感覚の教育」も――その「感覚の真空」という意味で「健康によくない」状態から子どもを救い上げる、立ち上らせ（成長させ）る。そんな意味で大事なのだろう。そして、インファント・スクールが暗示しているような、「作為的な子どもの組み分け」でない「自然な集団」に切り換えようという考えも交えて、教育の底辺＝出発点のところで重要な「脱皮の作業」がすすめられているのを私は見た気がした。

モンテッソーリ、ピアジェ、それからインファント・スクールの影響――これは、ニューヨークやロスアンジェルスの私立の幼児学校でも、メキシコでも、私は同じように「動いているすがたで」（たんに「知識」や流行（はやり）でなく）幼児教育の世界を立て直す――「考える人間をつくる」「世界をつくる」動因になっているように私は思った。

そういうアメリカ、メキシコで私が感じとったものから見て、日本はアメリカがもうそこから「脱皮」しようとしている、古くさい「甘ったれたものに」いつまでもしがみついて停滞し、その「考える人間に育つ」べき幼い子どもの、困った「感覚」「感情」の「真空」を、「商売人たち」がどこまでも金もうけの手段にしている、という民族の自殺的行為を、私は悲しく思ったりしたのである。

ハワイ大学で「日本文化」の講義などもしていた一人の教授が「最近の日本人のやっていることを見ていると、いまの日本人はやたらに駆けまわって享楽を探し求めること以外のどんなことにも興味を失った人間のような気がする」と言っていた。「そうでない部分」が、この日本に、どこかに「健在である」ことを私は願わずにいられない。「アメリカにも、ソ連にも、日本にもいい人がいる。いい人間が協力していけば世界はよくなる。」とルイスさんが二十五年まえに言った。そういう「よき人間」に「とどまる」気力、決断をもちたいと思う。

メキシコへの一人旅を心配して、ルイスさんから「先まわり」して手紙がきていた。そこにヘンリー・ソローの詩が書いてあって、私はこの旅行、そうしてこの日本の教育に、何か一つの大きな暗示を与えてくれている気がした。

冬の間に私たちを支え動かしているものは
過ぎ去った夏の何かの憶い出にちがいない……
この寒さはたんにほんのうわべだけのもの――
私たちの心の奥ずっとずっとその奥には
いまもなお夏のかがやきが残っているのだ。

（終り）